

難聴の子へ塾できるよ



NPO法人「MAMIE」は、代表の安藤美紀さん(右端)らスタッフも難聴者。「生徒をどう集めるか」「とにかく講師を集めない」と。会議では手話が飛び交い、熱の入った議論が続いた＝大阪市淀川区、染田屋写す

耳聞こえぬ女性、西宮で

生まれつき音が聞こえず、苦しみながら独学で大学入学を果たした大阪市の女性が、ほとんど例のない難聴児専門の学習塾をつくらうと奮闘している。「健常者と同じように学ぶ場があれば、難聴者の人生の可能性はもっと広がるはず」と、4月の開講を目指す。
(染田屋竜太)

「人生の可能性広げたい」

大阪市淀川区で、難聴者の子どもをサポートするNPO法人「MAMIE(マミー)」を運営する安藤美紀さん(40)。「健常者と同じように育てほしい」という母の方針で、小学校から高校まで通常学級で学んだ。でも、先生が何を話しているのかわからない。「わからないの？」と言われたら「知ったかぶり」をした。

「このままの人生でいいんだろか」。焦りから勉強を始めた。通信教育や、図書館での自習を重ねた。友達が連れだって学習塾に行く中、孤独を感じながら音のない世界でノートに向かい、現役で短大に合格した。難聴を理由に様々なことから逃げ続けてきた自分が目標をつかんだことがうれしかった。

卒業後、文書をコンピューターに入力するキーパンチャーなど聴覚を必要としない事務職をいくつか経験した。頼まれると他の社員の分も仕事をこなすが、給料は健常者よりずっと安い。昇進もなかなかできない。「難聴者は社会にちゃんとした評価を受けていない」と痛感した。現状を少しでも変えたいと、2004年にMAMIEを立ち上げ、難聴の子のためのパソコン教室を開いた。そこで、子どもたちが勉強に悩む実態に直面した。通常学級はもちろん、塾学校に通う児童・生徒も授業についていくのが精いっぱい。「やり方がわからない」「どうせ頭悪いから」。将来の夢を聞いたら「ホームレス」と答えた子がいた。心を

ギョッと締め付けられた気がした。難聴者が勉強できる環境を作り、能力があることを証明すれば活躍の場が広がるのではないかと。塾の開校に動き出した。

小学生・高校生 対象

対象は難聴の小学生・高校生。主要教科を教えるほか、文章教室も開くことにした。講師はやつと1人を見つけたばかり。教室は兵庫県西宮市内のアパートの一室。料金も時間割りも手探りだが、「とにかく一歩踏み出すことに意味があると思う」。

開校を前に体験学習に来た西宮市の辰己雅哉君(16)は塾学校に通う。でも学校では先生が一度に何人もの生徒を相手にするので、待っている時間がほとんどだ。体験学習では講師と二対一なので、ノートにかじりつき、講師の口元をじっと見つめる。「勉強も面白い」と思い始めた。「聞こえないからできないと思うのでなく、苦しみながらも勉強する『努力』を知ってほしい」と母親(46)。

社会福祉法人「日本身体障害者団体連合会」の森祐司常務理事は、「これまでの健常者に合わせた社会では、障害者は当然受けられるべき教育の機会もなかった。こうした動きがもっと広がり、障害者が『普通』に努力したり進路を選択したりできる社会環境をつくってほしい」と話す。

塾の問い合わせはファクス(06・6885・4141)かメール(mamie@mamie.jp)。